HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道家畜管理研究会参加に関する報告
Author(s)	塙, 友之; 中城, 敏明
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 6, 25-29
Issue Date	1999-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35378
Type	bulletin (article)
Note	研修等参加レポート
File Information	6_p25-29.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

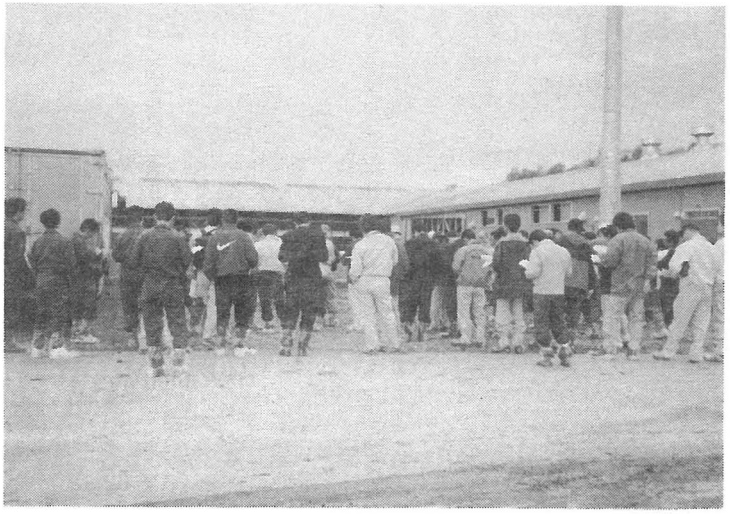
＜研修等参加レポート＞

北海道家畜管理研究会参加に関する報告

附属牧場　　塙　友之
附属牧場　中城　敏明
（環境・飼育系　家畜飼養班）

１０月６日 旭川において、北海道家畜管理研究会の現地研究会が開催され附属牧場からは塙、中城の２名が参加した。

研究会は秋の現地研究会と、冬の講演シンポジウムという構成が通常である。今回はその前者であり、参加者は畜産を中心とした大学、試験場の研究者、関連業界の技術スタッフ普及所の指導員、農協、農業開発公社、そして第一線で活躍中の酪農家など多彩なメンバーであった。これらの参加者が直接畜産現場に赴き生産環境、コスト技術面などをそれぞれの立場から覗き、普及、改善改良を図り勉強会をもとうというのが目的です。



今回のテーマは「上川地域に見る酪農の２つの戦略―通年舎飼方式と放牧主体方式」であった。

最初に訪れたのが上川町字豊原にある「豊原生産組合」という農業法人であった。上川の地は元々大雪アンガスの生産地として知られているが、酪農というイメージはあまりない。大規模経営を全面に出したこの牧場は550haの土地に1100頭余りの牛を飼っているという。3回／日の搾乳を9名の職員と2名の実習生で処理するというその動きに無駄はない。

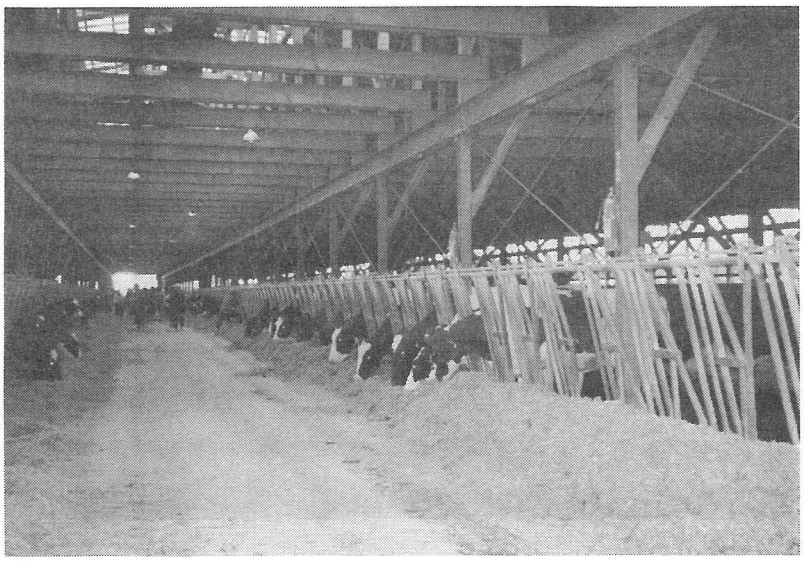
ここは通年舎飼されている為、4t／日のオガクズを消費するという。排出される糞尿も大量である。大型の作業機（ﾎﾞﾌﾞｷｬｯﾄ）が一気に糞尿を地下タンクまで押し落とし、落とされた混合物は攪拌されスクリュープレスと呼ばれる固液分離機によって吸い上げ分離される。分離固形化された糞はいくつかの過程を経て、有機肥料として販売し200万／月の収入をもたらすとか。堆肥の製品化及び圃場還元の原則そのもので理想的な処理法と感じた。

コーンを依託作付けしているがこれは標高600 mの地では生育上問題がありこの様な形になったとのこと。

フリーストール牛舎の中に案内してもらうとそれぞれの姿勢で休んでいる牛たちがとても大きく見えた。気になったのは 横臥する牛の腰が床の端よりかなり出ているが、そのためにストレスがたまり乳量に影響が及ぶということはないのだろうかという点である。

それと衛生上から慣行的に行われている断尾という方法が此処でもとられていた。家畜の尻尾はハエや虻を払ったり馬であれば高速でカーブを切る時、バランスを保つ上で重要な働きをすると言われている。その事と人間の都合に従うしかない家畜という意味での部外者の論理から一抹の抵抗感はあるものの、現段階で考え得る最良の合理的手段という気もした。酪農家にとって搾乳前の衛生管理に費やす時間と労力は大きなウエイトを占めるし、消費者にしても糞で汚れた搾乳現場を目にした時には牛乳を口にする事に少なからず抵抗感を覚えるという事になりかねないからだ。

ストールの床はゴムチップの入ったマットが敷かれ毎日石灰消毒されるという。清潔そうであった。



給飼時間が来たのか大型のミキサーフィダーがサイレージを早足で落としていった。そのサイレージを手にとって見るとグラス、配合と共にコーンマッシュが混合されており珍しく思った。調整室の片隅にガーリックの缶が積まれていた。見学が終わりバスに乗り込んだ時一瞬工場見学の後のような気分に浸っている自分が妙であった。

次に訪ねたのが東神楽町の多田牧場であった。50 頭前後の搾乳牛を（全頭数 120 頭）家族 5 人で対応している。家畜と労働力の比に余裕が感じられるのはここでは 10ha ほど畑作もおこなっている関係であろう。春の作付け時期と秋の収穫時期はかなりの忙しさが想像される。特に夏から秋にかけてはメインの乾草作業、ラップサイレージ作りと重なるはずである。後にご主人によると、畑作は「有り余る堆肥の処理」という発想から始まったそうである。

家畜糞尿は貴重な資源にもかかわらず良質の堆肥を作ろうとすると多額な資金を必要とする事などから、十分な形で圃場に戻されていない。牛舎裏のバーンクリーナーに山積みされた堆肥は何処でも目にする光景であるが、環境問題と糞尿処理の関係は根が深く、河川汚濁等の深刻な問題と直結しており悩む酪農家も多い。固液分離機の設置、堆肥場の屋

根かけ、分離後の曝気処理等方法はあるが高額な資金がネックとなる。低コスト、スリムな経営と地域の環境問題は同じ土俵で語らないと進展はないように思う。

採草地31ha、放牧地30ha共に半分の面積が傾斜地であった。しかし、表面はかなりの機械力で整地されており圃場作業に支障がきたすほどではないと感じた。5月末から9月中旬にかけて夜間放牧を行っており牛も自由で伸び伸びしており申し分ないとか。確かに先程のストールで飼養されていた牛とは体型、顔つきはっきり違うのだ。ただ、放牧地までの牛の出し入れに要する時間、手間が余りにもかかりすぎ課題だそうです。牛舎はごくシンプルで堅実な経営がうかがえた。ちなみに畑作は小豆、麦を作付けしており収入の方も中々のものだとのお話でした。

最後にお邪魔したのが神居町の斎藤牧場であった。
場主の斎藤さんは一家言お持ちで知名度も高く著述もされている方です。氏は昭和２２年に入植以来試行錯誤を重ね現在の経営体型に落ち着いたそうで、全てを経験から語るその言葉には自信と説得力が感じられた。

この地は山地に岩が点在し斜面はきつく作物生産にむかない。ここから山地に牛を放牧することとなる。機械力の入らない野草と笹の傾斜地に牧草をいかに作付けするか。
昔から遊牧の民が行っていた蹄耕法という草地造りの方法があるが斎藤氏は体験から同じ事を実行していたのである。

山地斜面の自然林を放牧草地にするためには2つの方法がある。ひとつは伐採、排土によって沢も埋めてしまい表面を整地し播種する。後に作業機も入るので採草地としても使える。もう一つは伐採はするが丘の上、斜面などに一部日陰林を残し野草、雑草の上から播種する。ここに綿羊、牛などの家畜を過放牧する。食べられた野草は翌春までは芽は出せないが家畜に踏み込まれた牧草の種は一週間もすると発芽する。２，３年もすると野草と牧草は逆転するのである。これが斎藤氏が用いた蹄耕法である。

牧場に着くと直ちに放牧地に案内され説明を受けた。同じ蹄耕法でも明らかな違いがあった。一度笹を刈り倒し1～2週間してから火を入れるらしい。火が入れられた立ち木の根元が黒く焦げている。そのあたりには5日前に播いたという牧草の芽がモヤシのような顔をだしていた。

私は思った。刈る、火を入れるこの手間のかかる行程は省いても草地は出来るのではないか。ここの牧場は70ha の放牧地全体を一牧区としているが、新たに拓こうとする一部の場所を限定して踏ませる事はないのだろうか。拓こうとする周囲をバラ線なり電牧で囲い過放牧すると十分笹根の間からでも発芽するように私には思われるのだが。しかし単に笹地といってもクマイザサとミヤコザサとでは茎の太さも根の張り方もかなりの違いがあり単純には同一視できないのは当然である。

広大な地に放された家畜は短めの牧草にまず食いつき、飽食状態での暇つぶしか過放牧でない限り好んで野草地や笹地には入らないと思う。つまり自然林に播かれた種は強制的に一定期間家畜を入牧させなければ発芽率はかなり悪いはずである。

蹄耕法草地は割安に造ることが出来るが、当然欠点もある。平地の牧草地なら一般的には６～７年で更新すると思うが、山地斜面では不可能である。地力、再生力の落ちた蹄耕法地の更新、ここは特に私の日頃の関心事の一つなので集中していると、「放牧している限り特別な更新は必要ない。牧草の根が古くなって生産力が落ちた所で徹底的に其処に牛を放しその爪によって草の根を切ってやれば良い。30～40 年経た放牧地も未だ一度も更新したことはない。」と一気に語った。

播種時はオーチャド 2.5 kgチモシー ペレニアル クローバーなど他種６～７品種を 0.5 kgの割合で入れるとの事、結果的にその土地の環境に合った品種が残る事がベストと考えているそうです。

施肥に関しては常に放牧地を観察しどの草種が衰退し何が繁茂してきたかによって施す肥料の種類を考えるとの事。

訪れた時期的なものもあるが案内させた範囲で見る限り、この放牧地で満足するだけの草はあるようには思えなかった。多分ここの牛は常に腹を空かしているように思う。何処を見てもなめ尽くされており此処で生活している牛を是非見たいと思ったが 70ha は広い、何処にも見えないのだ。

牧牛に使う種牛は万が一の事を考えて二頭入れておくとの説明に一瞬 オヤッと思ったが、肉用として素牛生産も行っている関係上一頭でも多くの仔を確保する必要があるということか。血統については無関心にならざるを得ないぐらい生産性を重視する姿勢なのだ。此処では自家生産牛だけで固定しているらしい。牛も大きくはないだろう。

人工受精もしないし、共済組合にも入らない。牧柵には間伐材を使いバラ線二本を回しただけ、徹底したコストダウンである。経営姿勢に一貫性があり徹底しているところに私は敬服した。乳量も年間4000～5000 kgと優良牛の半分でしかないが何故かここのミルクが美味そうに思えてきたのである。

時間の関係で牛舎、関連施設、乳牛と見る事が出来なかったのは残念であった。

この度は経営体型の異なる三つの牧場を訪れたが、乳を搾るという目的が同じでありながらこれほど過程に相違ある場所を選択された準備委員の方々に感謝したいと思う。
年間通して牛舎から出る事なく高タンパクな飼料を与え続けられる群れの一方で、常に腹八分で（私の推量）山野を徘徊する群れ。
この研究会への参加者は生産者、供給者側からが殆どだが、視点を代えてみると問題は多々有るのではないか。
毎日口にするミルクだけに考えさせられる事の多いそして貴重な一日であった。